もう大丈夫

「シニアのおじ様に託児をしてもらいます」と初めて宣告されたとき、う〜ん。本音は、正直心配。どうなることやら…。この「心配」は、保育の資格がないからとか、男性がお世話できるのかしらとか、そんな心配ではありません。娘が「男の人」を最も苦手にしていたからです。

案の定、初日の別れ際は大泣きでした。お母さん大学のお母さんが、大泣きする娘を抱っこし、私を会議に行かせてくれました。その後、娘を落ち着かせ、おじ様たちに託児をお願いし、遅れて参加してくれたお母さんがいました。そんな風にしか別れることができませんでした。「娘にはいい経験だろう。けれど、これからこんな別れが毎度続くのかしら…」と、不安にも思っていたのです。

しかし、2時間後。私が見た光景は、娘が子守隊長の竹中さんと両手をつなぎ、ブンブン飛行機をしてもらい、大喜びをしている姿。電車の音を聞きつけると、「見せて！」と娘から抱っこをせがむ姿…。娘はこの2時間で、おじ様たちから何を学び、何を得たのでしょう。娘が、血のつながっていない人に、何かを「お願い」する姿を今まで見たことがありませんでしたので、本当に驚きました。

そのとき私は、2つのことから「もう大丈夫」と思いました。娘は大きな階段を一つ登ったのだということ。そしてもう一つは、この場にいるおじ様たちに娘を預けること。その後、回を重ねるごとに、娘は子守隊の皆様にますます心を寄せていくのがわかります。

この日、娘とNちゃんを両手に抱っこし、ベランダへ出て景色を見せてくれていた竹中さんは、。娘は竹中さんを「おじいちゃん」と呼びます。子どもをW抱っこしてくれる、こんなステキなおじいちゃん、なかなかいませんね…。

（三澤こず恵）

お母さん大学で講座を受講中、
笑顔のお母さんたち。子どもたちのことはすっかり…

「信頼」を与えている。（編集部）

「子守隊」の主役は60代、70代。183シニアファッション研究所の研究員を中心とするおしゃれなシニアたち。竹中義行氏（68歳）を隊長に、現在、メンバーは、シニア男性8名と、サポートのシニア女性5名。

スタートしたきっかけは、いたってシンプル。これまでは仕事優先で、子育てなどほとんどしてこなかったというシニアのおじ様たちに、「懺悔ビジネス」を提案したのが始まりだった。よほど身に覚えがあるのか（笑）、「懺悔します！」と、即座に竹中氏。そして同犯者？いえ、ジョークのわかるかっこいいおじ様たちが続々入隊。最初は「どこまでできるか？」半信半疑のスタートではあった。ところがスタートしてみたら、「案ずるより産むが易し」。少々の課題はあるにせよ、ことのほかユニークで、素晴らしい、保育の場となった。

「子守隊」は有償ですか、ボランティアですか？　いえいえ、「子守隊」にはそんな価値観はありません。目的は、もっと別の次元。「お母さん大学のために、ぼくたちもできることで応援するよ」と。なんと、交通費もランチ代も自腹。時にはおじ様たちが、ごちそうしてくれることも！　お金がかかる慈善活動だ。

だが、子どもを預かることについては、「本気」でのぞまなければならない。日頃使わない神経と筋肉を使い、一生懸命に子どもの面倒を見ているおじ様たちの姿は感動だ。多少のぎこちなさは残るけれど、そのぎこちなさが何ともいえず新鮮。ゆったり、おっとりとした物腰、情緒の安定がもたらす効用か。不思議なくらい、自然に子どもたちにとけ込み、「安心」と

撮影／小川忠昭（子守隊員）

竹中義行さん

1941年兵庫県出身。大手化学会社をリタイア後、NPOサングリーン理事長、横浜マレットゴルフ協会副会長等を兼務。子守隊長。

原点は子どもの心になること。信頼して預けてくれるお母さんたちの期待に応えたい。

若い頃は自分の子どものお守りもほとんどしていないので、保育の正論を知っているわけではない。頼りは自分の子どもの頃の経験だけで、当時の気持ちを思い出して子どもが喜びそうなことを考えて試している。よそ様の子どもなので、最初はちょっと引けるところもあったし、子どものほうもどこのジイさんかわからないのですぐにはうまくいかなかったが、トライアンドエラーで徐々に子どもに接近し、子どもを遊んでやるのではなくて、自分も子どもになって遊んでもらうというスタンスなら、意外に子どもは安心して遊んでくれることがわかった。こちらが子どもたちに2時間お守りをしてもらっていると思えば気は楽だ。いつも年寄りとのおつきあいばかりの我々が、こんなことでもなければ、このような年齢の子どもたちと遊べる機会はお金を払ってもない。しかも何度か会っているうちに、子どももこちらを覚え、笑顔を向けてくれるので、こんなうれしいことはない。その上お母さんにも喜んでいただけるのだからこんなに調子のいい仕事はどこにもない。考えたら、素人のシルバー集団に大事な子どもを預けるのはお母さんにとっては心配で、勇気が要るはずだ。こちらも事故や混乱がないように、そのつど工夫が必要だ。毎回の子守りを通じて、問題と対策を話し合い、少しでも安全で子どものためになる子守りを目指していきたい。（竹中）

自分の孫と思えば気も楽だ。なるべく一人前に扱いたい。

もともと保育は女性の仕事という頭があるから、ぼくたち男にできるかな？と不安だったが、ぼく自身の経験にもなると思って参加した。でも何度か体験し、やれるんだということがわかってきたよ。考えたら、孫育てと同じ。変な遠慮をせずに、よその子も孫と同じように育てればいいんだね。ダメなことをしたら叱り、成長を喜ぶこともできる。長いものを持って走ったら危ないとか、お座りが不安定な時期は引っくり返ることもあるなんてことをどんどん思い出してきた。ぼくたちも、少しずつ勉強だね。ずっと泣いている子がいて、「ママ、もうじき戻ってくるよ」と丁寧に話をしたら、ぴたっと泣き止んだ。「子どもはわからない」ではなく、何でもきちんと話せば通じるね。できるだけ、一人前に扱うように心がけているよ。（伊藤）

伊藤琿春さん

1937年東京都出身。現役で不動産会社を経営。囲碁、バードカービング、篆刻等のサークルに所属。

「子守隊」の可能性は無限ですね。

さまざまな保育の現場で保育士として仕事をしてきて思うことは、行政や組織の中では、管理保育になりがちであるということ。どうしても、子どもを安全に保育することが優先されるので限界もあるが、本当に、子どもにとっての「いい時間」をつくることが一番大切だと思います。最近の親子の状況を見ていると、密室育児の危険性も感じます。母子にとって、異年齢、異世代との交流が大事。容易ではないけれど、地域全体で子どもを育てることができる環境をつくることの重要性を感じます。子守隊の保育は、素人ならではの大胆さ、斬新さが刺激的で、子どもたちにとっても、楽しいだろうなと。ルールや制限も、自分たちでつくっていけばいいのだから、こんなに素晴らしい保育はありません。今後はお母さんたちとも、積極的にディスカッションするなどして、みんなで子どもを育て、その喜びを分かち合っていけたらいいですね。まだまだ大いなる可能性を持つ子守隊、これからの時代に絶対に必要だし、きっと、ブレイクすると思います。（大谷）

子どもと対等な目線で向き合っているのが素敵！

これまでガールスカウトや保育ボランティアなど、さまざまな子育て支援活動をしてきて、改めて思うのは、私たち女性は、母親としての経験があるからか、保育をしてあげるという、どこか上から見るようなスタンス。たくさんのおもちゃやおやつを用意して、「はい、面倒見てあげるわよ」といった押し付け保育になりがちね。だから、子ども目線で「一緒に遊ぼう！」という、おじ様たちの子守りが、私たち女性とは全く違った姿勢や視点であることに驚いたし、感動もしました。もしかしたら、男性的な包容力なのか、「このおじさん、大丈夫」って、子どもたちが自然に寄ってくる感じ。言葉やマニュアルではなく、おじ様たちの生きてきた知恵や経験が、背中からにじみ出ているのかもしれませんね。（高松）

高松清美さん

1944年東京都出身。銀行に勤務後リタイア。地域でボランティア、子育て支援活動を経験。現在、NPO法人よこはま・七つ星に所属。

「子守隊憲章」

1条　子守隊は家に籠らず外で子守りをする
2条　子守隊はお母さんと子どもを本気で守る
3条　子守隊は常にかっこよくファッションを決める
4条　子守隊はオトコにしかできない子守りをする
5条　子守隊は子どもに泣かれたら一緒に泣く
6条　子守隊はお母さん業界新聞を読んで勉強する
7条　子守隊は子どもに子守りされて感謝する
8条　子守隊は子どもの心を忘れない
9条　子守隊は常に懺悔の気持ちを忘れない
10条　子守隊は子どもの笑顔を肴に酒を飲む